

形式：皮膚がん

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	nonmelanoma skin cancer	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Squamous cell carcinoma, Lymph node metastases	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上での目次名称	SCCCQ6-5	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ VI ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Nonmelanoma skin cancer Guideline for treatment and management in Australia (ガイドライン)	
	雑誌 ID		
	巻		
	号		
	ページ	86-88	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2002	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Austrarian Cancer Network Management of non-melanoma skin cancer Working Party	
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
その他著者 7			

レビュー研究の6項目	目的	有棘細胞癌のリンパ節転移の診断と治療
	データソース	専門家の意見
	研究の選択	同上
	データ抽出	同上
	主な結果	有棘細胞癌のリンパ節転移の頻度は低いが、転移した症例の予後は悪い。このため、臨床的に所属リンパ節転移を疑った場合は fine needle aspiration biopsy で確定診断をつけるべきである。
	結論	現在、リンパ節転移を疑った場合は fine needle aspiration biopsy を行って確定診断をつけた後、転移があれば根治的リンパ節摘出を行う。
	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( VI ) 有棘細胞癌に対するセンチネルリンパ節生検はその概念が新しいため、欧米の確立されたガイドラインにおいても推奨されていない。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	Nonmelanoma skin malignancies	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Sentinel lymphonodectomy in nonmelanoma skin malignancies	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上での目次名称	SCCCQ6-1	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Br J Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	149	
	号	4	
	ページ	763-769	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	2003	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Michl C	Department of Dermatology and Allergology, Klinikum Augsburg, Germany.
	その他著者 1	Starz H	
	その他著者 2	Bachter D	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	Non-melanoma skin cancerについてセンチネルリンパ節生検の妥当性を調べる	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	1 施設	
	対象者	High risk of the non-melanoma skin cancer 37名が対象。そのうち squamous cell carcinoma は 11例	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 12 )	
	介入 (要因曝露)	センチネルリンパ節生検	
	エンドポイント (77項目)	エンドポイント	区分
		1	固定率
	2	偽陰性率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	3	無病期間	1.主要 2.副次 3.その他 ( 2 )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	主な結果	High risk of the non-melanoma skin cancer 37名が対象。そのうち squamous cell carcinoma は 11例であった。11例中2例にセンチネルリンパ節転移が認められたため、根治的リンパ節摘出を行ったところ、2例ともセンチネルリンパ節以外のリンパ節にも有棘細胞癌の転移がみられた。その後、37症例に対し、平均2.5年の経過観察（中央値 2.4年）を行っており、センチネルリンパ節転移陰性の症例に再発転移はみられなかった。	
	結論	センチネルリンパ節生検はハイリスクの non-melanoma skin cancer においてリンパ節の微小転移を鋭敏に見つけ出す方法である。このことによってより正確なステージ分類が可能である。	
	備考		

レビュワーコメント	レビュワー氏名	山崎直也
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類 (IV ) 有棘細胞癌に対するセンチネルリンパ節生検は日本では実地医療に導入されつつあるように思われるが、欧米でもまだ、予後に関する有用性は明らかされていない。少数例で症例集積研究ともいえるが、比較的まとまった症例数を長期詳細に観察しており、後ろ向きコホート研究に準ずるものと評価した。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	有棘細胞癌	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Lymphatic mapping and sentinel lymphonectomy in recurrent cutaneous squamous cell carcinomas.	
診療科・科・科情報	論文の日本語タイトル		
	論文での引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	論文上の日次名称	SCCCQ6-2	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1 つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズ) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( V )	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Eur J Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	15	
	号	6	
	ページ	478-479	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.工学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月	2005		
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
	その他著者 1	Cecchi R	UO di Dermatologia Ospedale di Pistoia, V. Matteotti 1, S1100 Pistoia, Italy
	その他著者 2	Buralli L	
	その他著者 3	De Gaudio	
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

目的	再発有棘細胞癌を含んだ有棘細胞癌に対するセンチネルリンパ節生検の妥当性		
研究デザイン	症例集積研究		
セッティング	不明		
対象者	Recurrent squamous cell carcinoma 5 例		
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 3 )		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中高年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中高年 9.乳幼児・小児・青年・中高年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中高年 12.小児・青年・中高年・老人 13.青年・中高年 14.青年・中高年・老人 15.中高年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中高年 18.乳幼児・老人 19.小児・中高年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 5 )		
介入 (要因曝露)	センチネルリンパ節生検		
エンドポイント (7外括)	エンドポイント	区分	
一次研究の 8 項目	1	同定率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	2	副数	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	3	無病期間	1.主要 2.副次 3.その他 ( 2 )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
主な結果	対象は recurrent squamous cell carcinoma 5 例。男性 3 名、女性 2 名、年齢は 72 歳-80 歳と高齢であった。部位は四肢が 3 例、顔面 1 例、下口唇 1 例。5 例中 1 例にセンチネルリンパ節への微小転移があった。偽陰性例はなかった。センチネルリンパ節転移のあった 1 例は所属リンパ節郭清を追加しているが、他のリンパ節に転移はなかった。術後 18-40 か月の観察期間中、全例に再発、転移を認めなかった。		
結論	Recurrent squamous cell carcinoma に対してセンチネルリンパ節生検は feasible であり、リンパ節への微小転移を発見するために有用である。		
備考			

レビューワーコメント	レビューワー氏名	山崎直也
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類（ V ） 再発有核細胞癌も対象に加えられる点にも注目したいが症例数が少ない。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	有核細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Utility of sentinel lymphadenectomy in the management of patients with high-risk cutaneous squamous cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療*住*らひ情報	*住*らひでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	*住*らひ上での目次名称	SCCCQ6-3	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Dermatol Surg	
	雑誌 ID		
	巻	29	
	号	2	
	ページ	135-140	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月	2003		
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
		Reschly MJ	Department of Internal medicine, Division of Dermatology, University of South Florida College of Medicine, USA
	その他著者 1	Messina JL	
	その他著者 2	Zaulyanov LL	
	その他著者 3	Cruse W	
	その他著者 4	Fenske NA	
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	臨床的に所属リンパ節を触知しないハイリスクの有核細胞癌症例のセンチネルリンパ節の臨床・病理学的所見		
研究デザイン	後ろ向きコホート研究		
セッティング	1 病院		
対象者	High risk cutaneous squamous cell carcinoma で臨床的にリンパ節腫脹のない 9 例		
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 3 )		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児・小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 22 )		
介入 (要因曝露)	センチネルリンパ節生検		
エンドポイント (7外8)	エンドポイント	区分	
一次研究の 8 項目	1	同定	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
主な結果	臨床的に NO 症例 9 例中 4 例にセンチネルリンパ節への転移が病理組織学的に見つかった。4 例中 2 例はその後転移が出現し 2 年以内に原病死した。センチネルリンパ節転移(-)の 5 例は中央値 8 か月 (平均 13 か月)の経過観察期間中、経過良好であった。		
結論	症例数は少ないが四肢、体幹の有核細胞癌に対してセンチネルリンパ節生検は妥当な方法であると考えられ、この方法は臨床的に所属リンパ節を触れないハイリスク症例に対する重要な手技となる可能性があると考えられる。		
備考			

レビュワーコメント	レビュワー氏名	山崎直也
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類（ IV ） 皮膚原発の有棘細胞癌に対するセンチネルリンパ節の有用性を示唆する報告と考える。 少数例の研究で症例集積研究ともいえるが、長期的に観察している貴重なデータであり、後ろ向きコホート研究に準ずるものと評価した。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	Cutaneous nonmelanoma malignancy	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Sentinel node biopsy for high-risk nonmelanoma cutaneous malignancy	
診療科/科/科情報	論文の日本語タイトル		
書誌情報	論文の引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	論文の引用元での日次名称	SCCCQ6-4	
	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ V ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	Arch Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	140	
	号	1	
	ページ	75-79	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	2004	
	著者情報	筆頭著者	氏名
筆頭著者		Wagner JD	Division of Plastic surgery, Department of Surgery, Indiana University School of Medicine, USA
その他著者 1		Evdokimow DZ	
その他著者 2		Wenck S	
その他著者 3		Coleman III Jj	
その他著者 4		Weisberger E	Department of otolaryngology/Head and Neck Surgery
その他著者 5		Moore D	Department of Gynecology and Oncology
その他著者 6		Chuang T-Y	Department of Dermatology
その他著者 7			
その他著者 8			

一次研究の 8 項目	目的	High-risk cutaneous nonmelanoma malignancies に対するセンチネルリンパ節の妥当性の検討	
	研究デザイン	症例集積研究	
	セッティング	1 大学(Referral university medical center)	
	対象者	臨床的に所属リンパ節転移のない high-risk cutaneous nonmelanoma malignancies 24 症例	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 14 )	
	介入 (要因曝露)	センチネルリンパ節生検	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	sensitivity	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	24 症例中有棘細胞癌は 17 例。 17 例中 5 例にリンパ節転移があり、うち 4 例はセンチネルリンパ節であったが、1 例は nonsentinel node であった。この 1 例は原発巣の初回手術例ではなく、頭皮原発の有棘細胞癌再発例であった。24 例全体での経過観察期間の中央値は 10 か月で、領域内の非センチネルリンパ節への転移は起こらなかった。センチネルリンパ節生検を行った 24 例における Sensitivity は 88%、 negative predictive value は 0.94 であった。		
結論	センチネルリンパ節生検はリンパ節への微小転移を診断するための有用な方法である。この方法によって、より正確なステージ分類が可能になると考えられる。さらに症例数を増やし、方法を確立すべきである。		
備考			

レビュワーコメント	レビュワー氏名	山崎直也
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類（ V ） 比較的高頻度にセンチネルリンパ節転移がみられている。また有棘細胞癌の再発例に偽陰性例があることから、適応症例はよく吟味すべきと考える

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	有棘細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Sentinel Node Biopsy for Cutaneous Squamous Cell Carcinomas at Fujita Health University Hospital	
	論文の日本語タイトル	当院における有棘細胞癌に対する sentinel node biopsy の検討	
診療* 仕* ら化情報	* 仕* ら化での引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	* 仕* ら化上での目次名称	SCCCQ6-6	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システムティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	雑誌名	日皮会誌	
	雑誌 ID		
	巻	116	
	号	3	
	ページ	325-329	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.哲学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 1 )		
発行年月	2006		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	八代 浩	藤田保健衛生大学医学部皮膚科学講座
	その他著者 1	河合成海	
	その他著者 2	山北高志	
	その他著者 3	薬 政子	
	その他著者 4	香西伸彦	
	その他著者 5	有馬 豪	
	その他著者 6	牧浦伸彦	
	その他著者 7	松永佳代子	
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

目的	有棘細胞癌に対するセンチネルリンパ節生検の適応の検討		
研究デザイン	後ろ向きコホート研究		
セッティング	1 大学病院		
対象者	High risk squamous cell carcinoma 9 例		
対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 3 )		
対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )		
対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 14 )		
介入（要因曝露）	センチネルリンパ節生検		
エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
一次研究の 8 項目	1	固比率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	2	個数	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	3	無発期間	1.主要 2.副次 3.その他 ( 2 )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
主な結果	症例数は 9 例。全例でセンチネルリンパ節の同定に成功した。センチネルリンパ節の平均個数は 2.6 個。センチネルリンパ節に転移のみられた症例は 1 例であった。この 1 例は根治的郭清を加え、センチネルリンパ節以外のリンパ節に転移のないことを確認した。センチネルリンパ節転移のなかった 8 例については所属リンパ節郭清を行っていないため、センチネルリンパ節以外のリンパ節の転移の有無は不明である。経過観察期間は 1 か月から 31 か月、平均 15.8 か月で、1 例が他病死したが残りの 8 例は、再発、転移なく経過した。		
結論	今後大規模研究によってセンチネルリンパ節生検の適応症例の決定法を含めたハイリスク有棘細胞癌の治療ガイドラインの作成が必要である。		
備考			

レビューコメント	レビューワー氏名	山崎直也
	レビューコメント	エビデンスのレベル分類（Ⅳ） わが国における有棘細胞癌に対するセンチネルリンパ節生検の経験 を述べた報告は散見されるが本論文が最もまとまっている印象をう ける。少数例で症例集積研究ともいえるが、比較的まとまった症例 数を長期観察した貴重なデータであり、後ろ向きコホート研究に準 ずるものと評価した。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚がん	
	タイプ	医学情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Clinical practice guideline in oncology v. 1 2006, basal cell and squamous cell skin cancers.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドラインでの目次名称	SCCCQ7-1	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( Ⅰ )	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID		
	権		
	雑誌 ID		
	巻		
	号		
	ページ	SCC-1-REF-6	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )		
発行年月	2006		
著者情報	筆頭著者	氏名	所属機関
	筆頭著者	NCCN	
	その他著者 1		
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
その他著者 9			
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	特に記載なし
	データソース	Brodland の論文など
	研究の選択	特に記載なし
	データ抽出	特に記載なし
	主な結果	2cm未満の境界明瞭な SCC は、4mm マージンで 95% が治癒切除となる。
	結論	マージンは、low risk 群では 4-6mm, high risk 群のうち L 領域では 1cm, それ以外のものは Mohs surgery か CCPDMA (complete circumferential peripheral and deep margin assessment with frozen or permanent section) を推奨し、特にマージンを定めていない。これらの推奨カテゴリは 2A(臨床試験に基づく)などエビデンスレベルは低い。NCCN のコンセンサスであるものとされている。
レビューコメント	備考	low risk とされる大きさは発生部位によって異なり、体幹・四肢 (L 領域) では 2cm 未満であるが、顔・前額・頭皮・頭部 (M 領域) では 1cm, 顔面のマスクで覆われる領域・陰部・手足 (H 領域) では 6mm としている。その他、初発か再発か、免疫抑制の有無、放射線照射や慢性炎症が母地になっているか、増大速度、神経症状の有無、組織学的分化度や亜型 [adenoid(acantholytic), adenosquamous, desmoplastic がハイリスク], 深達度・腫瘍厚 (Clark のレベルⅣ以上あるいは厚さ 4mm 以上がハイリスク), 神経・血管浸潤の有無などが危険因子として挙げられている。
	レビューワー氏名	梅林芳弘
	レビューコメント	エビデンスのレベル分類 ( Ⅰ ) システマティックレビューに準じたエビデンスレベルとした。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Peplomycin therapy for skin cancer in Japan.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ8-1, WEB-CQ8-1	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV ）	
	Pubmed ID	2426073	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Drugs Exp Clin Res.	
	雑誌 ID		
	巻	12	
	号	1-3	
	ページ	247-55.	
	ISSN ナンバー	0378-6501 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	1986	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Ikeda, S.	Dept. Dermatol. Suitama Medical School
	その他著者 1	Ishihara, K.	
	その他著者 2	Matsunaka, N.	
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	Peplomycin の臨床効果を調べる	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	埼玉医科大学、国立がんセンター附属病院、和歌山県立医科大学、他	
	対象者	皮膚扁平上皮癌 95 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 1 )	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( ) 不明	
	介入（要因曝露）	Peplomycin	
	エンドポイント（アアウトカム）	エンドポイント	区分
	1	奏効率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2	5年生存率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	Peplomycin 日 2 回分割、筋注：20CR+33PR/86,RR61.6%（対象は anyTNM0:68.5%, anyTNM0:25%, M1:10%）。 Peplomycin+mitomycin C: 1CR+4PR/9（対象症例：T3,4） 5年生存率は TanyN1M0 (n=14) で 83%であった。 Peplomycin の 1 日 2 回分割投与法は、有害反応を低下させて効果を発揮した。Peplomycin+mitomycin C は T3,4 に良く効き、また、N1,N3,M1 の一部にも効果があった。手術や放射線療法と組み合わせることにより 5 年生存率は歴史対照に比べて改善された。		
結論	Peplomycin 単剤あるいは Peplomycin を含んだ多剤併用療法は、皮膚扁平上皮癌に有効である。		
備考			

レビュワーコメント	レビュワー氏名	宇原 久
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( IV ) 皮膚扁平上皮癌の化学療法の効果について検討されたこれまでの報告の中で、最も多数例の症例について検討した研究である。原発表には高い奏効率を示すが、リンパ節転移や遠隔転移についてはやはり厳しいものがある。このような状況下で手術や放射線療法と組み合わせることにより、TanyN1M0 (n=14) の 5 年生存率が 83%という値は立派である。進行期にあっても集学的治療が有効である可能性を示すものである。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ転入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌、基底細胞癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Cisplatin-based chemotherapy in advanced basal and squamous cell carcinomas of the skin: results in 28 patients including 13 patients receiving multimodality therapy.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ8-2	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV ）	
	Pubmed ID	2405109	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Clin Oncol.	
	雑誌 ID		
	巻	8	
	号	2	
	ページ	342-346	
	ISSN ナンバー	0732-183X (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	1990	
	著者情報		氏名
筆頭著者		Guthrie TH, Jr.,	Department of Hematology/Medical Oncology, Medical College of Georgia,
その他著者 1		Porubsky ES,	同上
その他著者 2		Luxenberg MN,	同上
その他著者 3		Shah KJ,	同上
その他著者 4		Wurtz KL,	同上
その他著者 5		Watson PR,	同上
その他著者 6			
その他著者 7			
その他著者 8			
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	CDDP 単剤あるいは CDDP を中心とした多剤併用化学療法法の臨床効果を調べる	
	研究デザイン	非ランダム化比較試験	
	セッティング	Georgia 医科大学を含む 4 施設	
	対象者	標準的な治療（外科療法や放射線療法）で効果がなかったか、原発巣の存在部位やサイズのため標準的な治療が適応にならなかったか、標準的な治療を行った場合には受容できない美容的な問題が残ると予想された皮膚扁平上皮癌 12 例、基底細胞癌 18 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 3 )	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 15 )	
	介入（要因曝露）	検討したレジメンは CDDP 単剤、CDDP+DXR、CDDP+5-FU、CDDP+BLM	
	エンドポイント (79) (注)	エンドポイント	区分
	1	奏効率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2	奏効期間	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	28 症例（皮膚扁平上皮癌 12 例、基底細胞癌 18 例）に対する治療効果は、CR28%、PR40%、ORR68%、奏効期間 4-82 ヶ月だった。28 例中、(A 群) 15 例は化学療法のみ、(B 群) 5 例は化学療法後に外科療法を行い、(C 群) 8 例は化学療法後に放射線療法を行った。A 群の臨床効果は CR:5 例、PR:5 例、奏効期間中央値 15 ヶ月、高齢者が多く含まれていたが、支持療法は不要であった。B 群は CR : 1 例、PR : 3 例、NR : 1 例、で化学療法後の切除によって 5 例全例が CR (CR 期間中央値 4 ヶ月+) になった。この群では術前化学療法により整容的に受容できる手術が行えた。C 群は CR:2 例、PR:3 例で、放射線療法を追加し、8 例中 7 例が CR になった。この群では CR 患者に再発は認められなかった (2 例のみ他病死)。皮膚扁平上皮癌のみでは 12 例中、CR : 4, PR : 3, RR:58%だった。有害反応により 5 例が治療中止となった。		

	結論	進行した皮膚扁平上皮癌や基底細胞癌の術前あるいは緩和療法として本法は有効である。
	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	宇原 久
	レビュワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( IV ) 皮膚扁平上皮癌や基底細胞癌の混在したデータであること、化学療法後に行った外科、放射線療法による臨床効果の評価において、化学療法で CR になった患者も含めているなど問題がある。ただし、検討された集団には、いろいろな合併症を持つ 70 歳、80 歳代の高齢者が含まれていることや、手術や放射線に抵抗性であった症例や手術療法単独では整容的に受容できない大型の病巣を持つ症例を対象にしている点など、実際の診療の場面で参考になるデータが複数含まれている。



形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Treatment of advanced squamous cell carcinoma of the skin with cisplatin, 5-fluorouracil, and bleomycin.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-C08-3	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ V ）	
	Pubmed ID	1698529	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	15	
	号	66	
	ページ	1692-6	
	ISSN ナンバー	0008-543X (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	1990	
	著者情報		氏名
筆頭著者		Sadek H.	Department of Medicine, Institut Gustave Roussy, Savigny le Temple, France.
その他著者 1		Azli N.	同上
その他著者 2		Wendling JL.	同上
その他著者 3		Cvitkovic E.	同上
その他著者 4		Rahal M, Mamelle G, et al.	同上
その他著者 5			
その他著者 6			
その他著者 7			
その他著者 8			
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	CDDP+5-FU+bleomycin の有棘細胞癌に対する臨床効果を明らかにする。	
	研究デザイン	症例集積研究	
	セッティング	フランスの 2 病院	
	対象者	進行期皮膚扁平上皮癌 14 例	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.若年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 1 2 )	
	介入 (要因曝露)	CDDP+5-FU+bleomycin	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	奏効率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	対象は最大径 6-15 cm (中央値 8 cm) の大型の原発巣に対する臨床効果を見た。 評価可能な 13 例中、CR:4, PR:7 で RR:84% 化学療法後に手術や放射線療法を併用することで 7 例に長期 CR が得られた。 グレード 3, 4 の有害反応は、血液毒性 4 例、消化器症状 5 例、管質性肺炎 1 例 (感染を併発して死亡) だった。		
結論	本治療は、美容的、機能的に問題を残すような SCC 症例において有効な治療法である。		
備考			

レビューワーコメント	レビューワー氏名	宇原 久
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( V ) 外科的切除が SCC 治療の第 1 選択であるが、一期的な切除で美容的、機能的に大きな問題を残すような場合は、放射線療法とともに、このような化学療法の適応についても検討が必要かもしれない。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌、メラノーマ	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル		
	論文の日本語タイトル	皮膚扁平上皮癌および悪性黒色腫に対する塩酸イリノテカン（CPT-11）の後期第II相試験。	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ8-4	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ IV ）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	1994214415	
	雑誌名	Skin Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	8	
	号	3	
	ページ	503-513	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	1993	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	池田重雄、	CPT11 研究会 日本皮膚悪性腫瘍分科会
	その他著者 1	石原和之、	
	その他著者 2	大浦武彦	
	その他著者 3	他	
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	CPT-11 の臨床効果を調べる	
	研究デザイン	コホート研究	
	セッティング	CPT-11 研究会皮膚悪性腫瘍分科会所属 22 施設	
	対象者	33 例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別別せず ( 1 )	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず ( 3 )	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず ( 14 )	
	介入（要因曝露）	CPT-11	
	エンドポイント (7外3)	エンドポイント	区分
	1	奏効率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
2		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	33 例中、2CR、11PR、RR:39.4% 原発巣に対する効果：26 例中、2CR、8PR、RR:38.5% リンパ節転移に対する効果：5 例中、3PR、RR:60% 肺転移に対する効果：3 例中、PR1、RR:33% PR11 例中 7 例で化学療法後の根治的手術が可能であった。 CR、PR 症例は治療開始後 2-6 週で効果がえられた。		
結論	CPT-11 は皮膚扁平上皮癌に対して効果がある。		
備考			

レビューコメント	レビューワー氏名	宇原 久
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 (IV ) 33 例と、SCC に対する化学療法の効果をみた報告例の中では症例数が多い。 症例集積研究とも考えられるが、比較的多まった数の症例を詳細に長期フォローしており、コホート研究に準ずるものと評価した。

形式：皮膚がん

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌、腺癌、メラノーマ、ほか	
	タイプ		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Intratumoral cisplatin/epinephrine-injectable gel as a palliative treatment for accessible solid tumors: a multicenter pilot study.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し ( 1 )	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-C98-5	
書誌情報	エビデンスのレベル分類	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（IV）	
	Pubmed ID	9560102	
	医中誌 ID		
	雑誌名		
	雑誌 ID	Otolaryngol Head Neck Surg.	
	巻	118	
	号	4	
	ページ	496-503	
	ISSN ナンバー	0194-5998 (Print)	
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 ( 1 )	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 ( 2 )	
	発行年月	1988	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Burris HA, 3rd.	Brooke Army Medical Center, Fort Sam Houston, Texas, USA.
	その他著者 1	Vogel CL	
	その他著者 2	Castro D	
	その他著者 3	Wishra L	
	その他著者 4	Schwarz M.	
	その他著者 5	Spencer S, et al.	
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	緩和的治療としての CDDP+epinephrine の有効性を調べる	
	研究デザイン	コホート研究	
	セッティング	米国 Brooke Army Medical Center 他 15 施設	
	対象者	手術、放射線、手術、放射線、全身化学療法法の拒否あるいは適応のない皮膚の局所病変を持つ患者 45 例。なお、41 例 (90%) の症例は既治療例（手術、放射線、全身化学療法、温熱療法）。皮膚扁平上皮癌 21 例、洗頭 17 例、メラノーマ 4 例、他 3 例。	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず* ( 2 )	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず* ( 3 )	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず* (14)	
	介入（要因曝露）	CDDP+epinephrine	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	奏効率	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	2	奏効期間	1.主要 2.副次 3.その他 ( 1 )
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	全ての症例（皮膚扁平上皮癌以外を含む）の奏効率は CR40%、PR10%。皮膚扁平上皮癌のみでは、21 例 32 例中、CR12 例、PR3 例、RR:38% 有害反応は局所反応 82%、嘔気 22%、嘔吐 1 6%、熱 1 1%、痛み 11%、だった。		
結論	本治療法は緩和療法として有効である。		
備考			

レビューワーコメント	レビューワー氏名	宇原 久
	レビューワーコメント	エビデンスのレベル分類 ( IV ) 本邦ではなじみの少ない治療法である。手術、放射線療法、全身化学療法などの施行後に再発し増悪してくる病巣に対する治療法として、今後本邦でも検討が必要かもしれない。治療を行った腫瘍のサイズや SCC における奏効期間（他の腫瘍も含めた CR 病巣の奏効期間は中央値 160 日、28-469 日と示されている）。症例集積研究とも言えるが、奏効期間も長期観ており、コホート研究に準じるものと評価した。

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Cutaneous squamous-cell carcinoma	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの日次名称	SCC-CQ9-1, WEB-CQ9-1, SCC-CQ10-1	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（1）	
	Pubmed ID	11274625	
	医中誌 ID		
	雑誌名	N Engl J Med	
	雑誌 ID		
	巻	344	
	号	13	
	ページ	975-83	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2001 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Alam, M	コロンビア大学
	その他著者 1	Ratner, D	Columbia-Probyterian Medical Center
	その他著者 2		
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	皮膚扁平上皮癌の疫学、診断、治療法をレビューする
	データソース	記載なし
	研究の選択	記載なし
	データ抽出	記載なし
	主な結果	発生に寄与する危険因子：Table 1 参照 臨床所見：扁平上皮癌は顔面部領域から最も発生しやすかった。Keratoacanthoma は増殖スピードが遅かった（病理学的鑑別は時に困難）。Verrucous carcinoma はまれな扁平上皮癌で、切除で通常は治癒した。 再発の危険因子：Table 2 参照 腫瘍径、免疫抑制、既往治療歴、深部浸潤(>4mm)、低分化型、神経浸潤など 治療法：切除、electrodesiccation、cryosurgery などで 90%以上が治癒した。低リスクであれば再発率は 5-8%程度。高リスクでは 15-25%に達した。 放射線療法：手術に不適応の症例などに行われ、分割照射を行う。他の治療法との組み合わせで行われることが多い。高リスク群では術後放射線療法が考慮される。リンパ節転移例では手術、放射線、手術+放射線などが行われ、約 30-40%が治癒するにとどまった。
	結論	皮膚扁平上皮癌は概ね良好な成績であるが、一部の症例で再発や転移が見られ、その予後は不良である。十分な問診と全身の皮膚の観察が重要である。皮膚癌はある程度予防可能な疾患である。日焼けを避けるなどして命に関わる重篤な病態を作らないよう喚起を促す必要がある。
備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューコメント	皮膚扁平上皮癌の疫学、診断、治療法までをレビューしている。一読の価値あり。厳密にはシステマティック・レビューではないが、詳細に検討されており、それに準ずるものと評価した。 レベル I

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Prognostic factors for local recurrence, metastasis, and survival rates in squamous cell carcinoma of the skin, ear, and lip. Implications for treatment modality selection	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの日次名称	SCC-CQ9-2, WEB-CQ9-2, SCC-CQ10-9, WEB-CQ10-1	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（1）	
	Pubmed ID	1607418	
	医中誌 ID		
	雑誌名	J Am Acad Dermatol	
	雑誌 ID		
	巻	26	
	号	6	
	ページ	976-90	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本文語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1992 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Rowe DE	テキサス大学
	その他著者 1	Carroll RJ	テキサス A and M 大学
	その他著者 2	Day CL, Jr	テキサス大学
	その他著者 3		
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	皮膚原発（皮膚、耳、口唇）扁平上皮癌の局所再発率、転移率、生存率を検討する。
	データソース	記載なし
	研究の選択	除外規準 20 例未満 初回治療と再治療を混在させて再発・転移率を算出している報告 同一の症例群を用いて別の雑誌に再投稿している報告 基底細胞癌を区別して扱っていない報告 治療法別の算出をしていない報告
	データ抽出	記載なし
	主な結果	局所再発（経過観察が長くなるほど高くなった：7.6%→10.5%） electrodesiccation：1.3→3.7% 切除：5.7→8.1% 集学的治療：4.0→7.9% 耳原発例は再発率が高かった：16.1→18.7% 転移（経過観察が長いと転移率も高くなった） 日に当たる部位（2.3%→5.2%） 口唇（7.2%→13.7%） 創部（26.2%→37.9%） 局所再発・転移のリスク 腫瘍径 2 cm 以上、Clark レベル IV～V、低分化、耳や口唇原発、日に当たらない場所の腫瘍、既往治療、周囲神経浸潤、免疫抑制治療法別局所再発率 手術：8.1%、放射線療法：10%、手術+放射線療法：7.9% Mohs 手術：3.1% 転移を有する症例の生存率 手術+放射線療法の成績が良かった
	結論	経過観察が長くなるほど再発率は高くなる。 再発の危険因子は、腫瘍径 2 cm 以上、Clark レベル IV～V、低分化、耳や口唇原発、日に当たらない場所の腫瘍、既往治療、周囲神経浸潤、免疫抑制。 再発の危険性が高い例や転移例では集学的治療が良いかもしれない。
備考		
レビューコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューコメント	レベル I

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌、扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Radiotherapy for locally advanced basal cell and squamous cell carcinomas of the skin</b>	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ9-3	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズ) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( IV )	
	Pubmed ID	15380573	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biol Phys	
	雑誌 ID		
	巻	60	
	号	2	
	ページ	406-11	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2004年	
	著者情報		氏名
筆頭著者		Kwan W	British Columbia Cancer Agency
その他著者 1		Wilson D	同上
その他著者 2		Moravan V	同上
その他著者 3			
その他著者 4			
その他著者 5			
その他著者 6			
その他著者 7			
その他著者 8			
その他著者 9			
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	局所進行期の基底細胞癌と扁平上皮癌の放射線治療成績を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	British Columbia Cancer Agency	
	対象者	基底細胞癌(61例) T1:0%、T2:13%、T3:61%、T4:23% 扁平上皮癌(121例) T1:6%、T2:19%、T3:41%、T4:22% リンパ節転移:基底細胞癌 0%、扁平上皮癌 31% 原発部位:基底細胞癌(頭頸部 100%) 扁平上皮癌(頭頸部 84%、体幹部 9%、四肢 7%) 治療:初回治療 45~49%、再発時としての治療 51~55%	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (14)	
	介入 (要因曝露)	線質:コバルト、4MV以上のX線、電子線を症例毎に選択 線量:35Gy/5回、40-45Gy/10回、50-55Gy/15-20回、60Gy/25回、60-70Gy/30-35回	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	局所制御率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
3	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	4年生存率:基底細胞癌 100%、扁平上皮癌 60% 4年局所制御率:基底細胞癌 86%、扁平上皮癌 58% 再発期間の中央値:40.5か月(基底細胞癌)、5か月(扁平上皮癌) 扁平上皮癌で死亡した37例中、30例が局所、7例が遠隔転移が原因 予防的リンパ節領域への照射は局所領域リンパ節の制御に寄与しない		
結論	基底細胞癌は局所進行期でも放射線治療が有効。 一方、扁平上皮癌では放射線治療後早期に再発する症例もあり不幸な転帰をとる症例がある。局所再発が死因の最多であった。		

	備考	
レビューワーコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューワーコメント	進行期のみを対象とした適応的研究 レベル 1 V

レビュー研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌、扁平上皮癌	
	タイプ	レビュー	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Principles of management of basal and squamous cell carcinoma of the skin.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ9-4	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズ) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( II )	
	Pubmed ID	7804997	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Cancer	
	雑誌 ID		
	巻	75	
	号		
	ページ	699-704	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1995 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Fleming ID	デネシー大学
	その他著者 1	Amonette R	同上
	その他著者 2	Monaghan T	同上
	その他著者 3	Fleming MD	同上
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

レビュー研究の6項目	目的	皮膚基底細胞癌および扁平上皮癌の治療に関するレビューを行う。
	データソース	記載なし
	研究の選択	記載なし
	データ抽出	記載なし
レビューワーコメント	主な結果	5年無再発生存率 切除術: 89.9%, Mohs 手術: 99.0%, 放射線療法: 91.3% 切除術: 最も多く用いられる治療法。最低 5 mm 以上のマージンを付けて切除。 Mohs 手術: (利点) 局所制御率が高い。局所麻酔で施行可能、安価。(欠点) 再建が必要となる可能性がある。単純切除より高価。 放射線療法: (利点) 麻酔不要、鼻や目などにも適応可能、高齢者にも適応可能、大きな病変にも適応可能。(欠点) 高価、断端を評価できない、発癌性。 リンパ節転移例では、手術と放射線療法が行われる。
	結論	単純切除、Mohs 手術、放射線療法それぞれに利点と欠点があり、両者を理解して治療法を選択する必要がある。
	備考	
	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューワーコメント	治療法全体を見渡したわかりやすいレビュー。厳密にはシステマティック・レビューではないが、詳細に検討されており、それに準ずるものと評価した。 レベル I

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌、扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	External irradiation of epithelial skin cancer	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ9-5	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究 (コホート研究や症例対照研究) V. 記述研究 (症例報告やケースシリーズ) VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見 ( IV )	
	Pubmed ID	2394605	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biol Phys	
	雑誌 ID		
	巻	19	
	号	2	
	ページ	235-42	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	1990 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Lovett RD	ワシントン大学 Mallinckrodt 放射線研究所
	その他著者 1	Perez SA	同上
	その他著者 2	Shapiro CJ	同上
	その他著者 3	Garcia DM	同上
	その他著者 4		
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	基底細胞癌と扁平上皮癌の放射線治療成績を解析する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	ワシントン大学 Mallinckrodt 放射線研究所	
	対象者	基底細胞癌 242 例、扁平上皮癌 92 例、その他 5 例 リンパ節転移: 基底細胞癌 1/242、扁平上皮癌 14/92 遠隔転移: 1 例 部位: 基底細胞癌 (頭頸部 226 例、四肢・体幹部 16) 扁平上皮癌 (頭頸部 84 例、四肢・体幹部 13) ( 1966, 1-1986, 12 )	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍別不詳 (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (15)	
	介入 (要因曝露)	表在 X 線照射: 187 例、電子線照射: 57 例、超高圧 X 線照射: 15 例 複合: 80 例	
	アウトカム (アウトカム)	エンドポイント	区別
		1	局所制御
	2	局所制御に与える予後因子	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3	整容性	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	4	有害事象	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
主な結果	局所制御率: 86% (基底細胞癌 91%、扁平上皮癌 75%) 大きさ別局所制御 <1 cm 基底細胞癌 97%、扁平上皮癌 91% 1-5 cm 基底細胞癌 87%、扁平上皮癌 76% >5 cm 基底細胞癌 87%、扁平上皮癌 56% 線質別制御は腫瘍の大きさ・厚みに影響している 整容性: 良好 92% <1 cm (98%), 1-5 cm (88%), >5 cm (82%) 有害事象: 5.5% <1 cm (0.9%), 1-5 cm (7.1%), >5 cm (13.6%)		

	結論	放射線治療は皮膚癌に有用である。局所制御、整容性、有害事象は、腫瘍径に依存するため早期の治療が勧められる。局所制御と整容性は放射線治療技術に依存するため注意深い放射線治療が必要。
	備考	
レビューコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューワーコメント	分母が 10 例以下の解析で百分率を出すのはいただけない解析であろう。 レベル 1 V

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌、扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Studies on Radiation Therapy for Carcinoma of the Skin	
	論文の日本語タイトル	皮膚癌の放射線治療成績に関する検討	
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドラインでの目次名称	SCCCQ9-6	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（IV）	
	Pubmed ID		
	医中誌 ID	1987081960	
	雑誌名	日本医学放射線学会誌	
	雑誌 ID		
	巻	46	
	号	8	
	ページ	1048-56	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (1)		
発行年月	1986 年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	岡崎 篤	群馬大学
	その他著者 1	高橋 育	同上
	その他著者 2	伊藤 潤	同上
	その他著者 3	池田 一	同上
	その他著者 4	中村 勇司	同上
	その他著者 5	竹内 美徳	同上
	その他著者 6	新部 英男	同上
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	皮膚原発基底細胞癌および扁平上皮癌の放射線治療成績を検討する。	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	群馬大学	
	対象者	1970-1983年に治療した皮膚癌 112例 基底細胞癌 16例 (15例が顔面原発) T1: 8例、T2: 5、T3: 1、T4: 2 扁平上皮癌 96例 (顔面: 42例、陰茎: 30、外陰: 9、他) T1: 22例、T2: 31、T3: 31、T4: 12	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (1)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (14)	
	介入 (要因曝露)	基底細胞癌 放射線療法: 8例、手術+放射線療法: 8例 扁平上皮癌 放射線療法: 56例、手術+放射線療法: 40例 放射線療法 電子線照射(8~12MeV)またはコバルト、10MVX線 1回 6~7 Gy、週2回 (コバルト、X線では2 Gy/回で50 Gy) 基底細胞癌: 5~6回、扁平上皮癌: 7~8回	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	

主な結果	局所制御 基底細胞癌：81% 扁平上皮癌：61% (T1: 100%, T2: 58%, T3: 18%, T4: 0%) 手術後放射線療法施行(34例)：全例制御 放射線療法後手術：50% 生存率：5年生存率 73% リンパ節転移陰性例 86%、陽性例 34% 重篤な障害：2例（眼瞼原発、開眼障害）
	結論 局所制御率は良好であり、有害事象も許容範囲内であった。
	備考
レビュワーコメント	レビュワー氏名 豊岡 直人
	レビュワーコメント 後ろ向き研究ではあるが、日本から発表された貴重なデータ レベル 1 V

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Cutaneous metastatic squamous cell carcinoma to the parotid gland: analysis and outcome</b>	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ9-7, SCC-CQ10-3	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（IV）	
	Pubmed ID	15287040	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Head Neck	
	雑誌 ID		
	巻	26	
	号	8	
	ページ	727-32	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	2004年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Audet N	Princess Margaret Hospital
	その他著者 1	Palme CE	同上
	その他著者 2	Gullane PJ	同上
	その他著者 3	Gilbert RW	同上
	その他著者 4	Brown DH	同上
	その他著者 5	Irish J	同上
	その他著者 6	Neligan P	同上
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
	その他著者 10		

目的	耳下腺に浸潤した皮膚扁平上皮癌の治療成績を解析する		
研究デザイン	後ろ向きコホート研究		
セッティング	Princess Margaret Hospital		
対象者	56例の耳下腺に浸潤した皮膚扁平上皮癌 腫瘍径：1-12 cm（平均 4 cm） 臨床的頸部リンパ節転移：6例 臨床的神経浸潤：13例 皮膚浸潤：13例		
対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (15)		
介入（要因曝露）	手術単独：7例、放射線療法単独：12例、手術＋放射線療法：37例 手術：保存的耳下腺切除(57%)、根治的耳下腺切除(43%) 放射線療法の詳細の記載なし		
エンドポイント (79154)	エンドポイント	区分	
1	再発率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
2	無病生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	全症例の再発率：29% 再発率 手術＋放射線療法：27%、手術単独：57%、放射線療法：17% 3年の無増悪生存率（O'Brien 分類） P1：70%、P2：83%、P3(>6cm)：47% 顔面神経麻痺を有する症例は予後不良であった。		
結論	耳下腺に浸潤した皮膚扁平上皮癌は予後不良であり、集学的治療が必要である。径 6cm 以上の腫瘍、顔面神経麻痺を来した症例では予後不良。		



	備考	
レビューコメント	レビューワー氏名	鹿間 直人
	レビューワーコメント	耳下腺に浸潤した症例のみを集積したためもあり症例数が少なく、治療法別の成績から、集学的治療が重要と導き出しにくい。 レベル ⅠV

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	<b>Skin cancer of the head and neck with clinical perineural invasion</b>	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ9-8, SCC-CQ10-10	
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（ⅠV）	
	PubMed ID	10758309	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biol Phys	
	雑誌 ID		
	巻	47	
	号	1	
	ページ	89-93	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.哲学 3.看護 4.その他 (1)	
原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
発行年月	2000年		
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	McCord MW	フロリダ大学
	その他著者 1	Mendenhall WM	同上
	その他著者 2	Parsons JT	同上
	その他著者 3	Amdur RJ	同上
	その他著者 4	Stringer SP	同上
	その他著者 5	Cassisi NJ	同上
	その他著者 6	Million RR	同上
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	頭頸部原発の神経浸潤の症状を呈する皮膚癌における治療成績を解析する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	フロリダ大学	
	対象者	頭頸部原発の神経浸潤の症状を呈する皮膚癌 62 例 上顎神経(27 例)、顔面神経 (22)、その他 (19) 原発部位：頬部(18 例)、口唇(12)、頭皮(9)、耳周囲(8)、その他 T 病期：全例 T4 N 病期：N0(45 例)、N1(4)、N2(3) 初回治療例 21 例、再発症例 42 例	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (14)	
	介入 (要因曝露)	初回治療例 21 例 放射線療法単独：12 例、手術+術後放射線療法：9 例 再発症例 41 例 放射線療法単独：18 例、手術+術後放射線療法：21 例、術前放射線療法+手術：2 例 照射法：外照射単独：23 例、外照射+組織内照射：4 例、組織内照射単独：3 例 1 日 1 回照射：46 例 1 回線量 1.86 Gy、総線量 33.3-79.5 Gy (平均 67.58 Gy) 1 日 2 回照射：13 例 1 回線量 1.14 Gy、総線量 69.6-79.2 Gy (平均 74.4 Gy)	
	エンドポイント (79134)	エンドポイント	区分
		1	局所制御率
	2	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3	領域リンパ節再発	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	4	遠隔転移	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	5	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	6	有害事象	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )

	主な結果	局所再発率：45%（局所のみ：39%） 局所再発に与える予後因子：年齢、再発例、臨床的神経浸潤の兆候、治療法（手術+照射 vs. 照射単独） 領域リンパ節再発：11% 遠隔再発：1例のみ（局所再発も伴っていた） 10年生存率：31%、10年疾患特異生存率：46% 有害事象：11例で重篤な有害事象あり（骨壊死、脳障害、穿孔）
	結論	神経症状を呈する多くの症例で、不完全切除に終わった。約半数の症例で根治的放射線療法単独または、手術との併用により治療させることができた。年齢、再発例、臨床的神経浸潤の兆候は予後に関与していた。
	備考	術前照射は2例のみ。
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	組織内照射を併用した症例が多く見られるため有害事象がやや多い印象。 レベル IV

一次研究用フォーム		データ記入欄		
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌		
	タイプ	医学専門情報		
タイトル情報	論文の英語タイトル	Perineural spread of cutaneous squamous cell carcinoma via the orbit. Clinical features and outcome in 21 cases		
	論文の日本語タイトル			
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)		
	ガイドライン上での目次名称	SCC-CQ9-9, SCC-CQ10-4		
書誌情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（IV）		
	Pubmed ID	9307641		
	医中誌 ID			
	雑誌名	Ophthalmology		
	雑誌 ID			
	巻	104		
	号	9		
	ページ	1457-62		
	ISSN ナンバー			
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)		
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)		
	発行年月	1997年		
著者情報	氏名			
	所属機関			
	筆頭著者	McNab AA	Royal Victorian Eye, and Ear Hospital	
	その他著者 1	Francis IC	同上	
	その他著者 2	Benger R	同上	
	その他著者 3	Crompton JL	同上	
	その他著者 4			
	その他著者 5			
	その他著者 6			
	その他著者 7			
	その他著者 8			
その他著者 9				
その他著者 10				
一次研究の8項目	目的	眼窩周囲に発生した皮膚扁平上皮癌のうち神経周囲浸潤をきたした症例の臨床像、治療法、治療成績を解析する		
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究		
	セッティング	Royal Victorian Eye, and Ear Hospital		

対象者	21例の眼窩周囲に発生した皮膚扁平上皮癌のうち神経周囲浸潤をきたした症例 部位：前頭部(11例)、眼角(3)、頬(3)、側頭部(2)、他		
対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)		
対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)		
対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (14)		
介入 (要因確認)	外部照射単独：9例、根治的手術+放射線療法：3例、保存的手術+放射線療法：3例、根治的手術単独：2例、保存的手術：1例、無治療：3例		
エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分	
	1	再発形式	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	2	予後	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
	3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
	10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )
主な結果	さまざまな治療が行われていたが予後は不良。 14例は9か月~5年で死亡。原因は局所または頭蓋内浸潤による。 2例のみが14~18年生存。		
結論	眼窩周囲の神経周囲浸潤を呈した症例の予後は不良。放射線療法は姑息的治療としては有効か。根治的手術は周囲正常組織もあり限られた症例に適応となる。		
備考			
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人	
	レビュワーコメント	神経周囲浸潤例が予後不良であることはわかるが、治療法に関する知見はない。 レベル I V	

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	皮膚原発扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Carcinoma of the skin metastatic to parotid area lymph nodes	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
書誌情報	ガイドライン上の目次名称	SCC-CQ9-10, SCC-CQ10-7	
	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験による III. 非ランダム化比較試験による IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究による） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズによる） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（1V）	
	Pubmed ID	1938361	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Head Neck	
	雑誌 ID		
	巻	13	
	号	5	
	ページ	427-33	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	1991年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Taylor BW Jr	フロリダ大学
	その他著者 1	Brant TA	同上
	その他著者 2	Mendenhall NP	同上
	その他著者 3	Mendenhall WM	同上
	その他著者 4	Cassisi NJ	同上
	その他著者 5	Stringer SP	同上
	その他著者 6	Million RR	同上
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の8項目	目的	皮膚癌（扁平上皮癌と基底細胞癌）で耳下腺領域に転移した症例の治療成績を検討する	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究	
	セッティング	フロリダ大学	
	対象者	扁平上皮癌 57例、基底細胞癌 3例 全例に耳下腺領域にリンパ節転移がある（原発巣の直接浸潤例なし） 原発巣は制御されている：41例、原発巣再発：14例	
	対象者情報（国籍）	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず* (3)	
	対象者情報（性別）	1.男性 2.女性 3.男女区別せず* (3)	
	対象者情報（年齢）	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず* (15)	
	介入（要因曝露）	手術単独治療 8例、放射線療法単独 16例、両者の併用 37例 放射線療法：1回線量 1.8-2 Gy 総線量：60 Gy（切除断端陰性）、66 Gy（顕微鏡的陽性）、70 Gy（腫瘍が肉眼的に残存している）	
	エンドポイント（7項目）	エンドポイント	区分
	1	局所制御	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
3	疾患特異生存率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
4	有害事象	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	局所制御 手術単独：5/8 (63%)、放射線療法単独：6/13 (46%)、 手術+放射線療法：3/2/3/6 (89%) 手術と放射線療法で再発した症例は切除断端が陽性であるか、肉眼的に腫瘍が残存した腫瘍であった。切除断端が陰性で、顔面神経浸潤がない腫瘍は全て制御された。 手術と放射線療法を行った症例の5年疾患特異生存率は75%であった。両者を併用した群で重篤な合併症はなかった。		
結論	手術+放射線療法を施行した症例の局所制御は良好であった。特に、切除断端が陰性で、顔面神経浸潤がない腫瘍は全て制御された。		

	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	線量に関する記載が考察に書かれており、読みづらい論文。患者の背景なども表になっていない。 バイアスを含んだ患者選択であり、結果の解釈は要注意。 レベル 1V

一次研究用フォーム		データ記入欄	
基本情報	対象疾患	基底細胞癌、扁平上皮癌	
	タイプ	医学専門情報	
タイトル情報	論文の英語タイトル	Electron beam therapy is not inferior to superficial x-ray therapy in the treatment of skin carcinoma.	
	論文の日本語タイトル		
診療ガイドライン情報	ガイドラインでの引用有無	1.有り 2.無し (1)	
	ガイドライン上の目次名称	SCCCQ9-11	
査読情報	研究デザイン	I. システマティック・レビュー/メタアナリシス II. 1つ以上のランダム化比較試験 III. 非ランダム化比較試験 IV. 分析疫学的研究（コホート研究や症例対照研究） V. 記述研究（症例報告やケースシリーズ） VI. 患者データに基づかない、専門委員会や専門家個人の意見（IV）	
	Pubmed ID	7635774	
	医中誌 ID		
	雑誌名	Int J Radiat Oncol Biol Phys	
	雑誌 ID		
	巻	32	
	号	5	
	ページ	1347-50	
	ISSN ナンバー		
	雑誌分野	1.医学 2.歯学 3.看護 4.その他 (1)	
	原本言語	1.日本語 2.英語 3.ドイツ語 4.その他 (2)	
	発行年月	1995 年	
著者情報		氏名	所属機関
	筆頭著者	Griep C	Rijnsburgerweg 大学病院
	その他著者 1	Davelaar J	同上
	その他著者 2	Scholten AN	同上
	その他著者 3	Chin A	同上
	その他著者 4	Leer JW	同上
	その他著者 5		
	その他著者 6		
	その他著者 7		
	その他著者 8		
	その他著者 9		
その他著者 10			

一次研究の 8 項目	目的	皮膚癌に対し電子線照射が表在 X 線照射と同等の効果を持つかを検討	
	研究デザイン	後ろ向きコホート研究および症例対照研究	
	セッティング	Rijnsburgerweg 大学病院	
	対象者	基底細胞癌 (295 例)、扁平上皮癌(94 例) 平均年齢 71.5 才 男性：251 例、女性：138 例	
	対象者情報 (国籍)	1.日本人 2.日本人以外 3.国籍区別せず (3)	
	対象者情報 (性別)	1.男性 2.女性 3.男女区別せず (3)	
	対象者情報 (年齢)	1.乳幼児 2.小児 3.青年 4.中年 5.老人 6.乳幼児・小児 7.乳幼児・小児・青年 8.乳幼児・小児・青年・中年 9.乳幼児・小児・青年・中年・老人 10.小児・青年 11.小児・青年・中年 12.小児・青年・中年・老人 13.青年・中年 14.青年・中年・老人 15.中年・老人 16.乳幼児・青年 17.乳幼児・中年 18.乳幼児・老人 19.小児・中年 20.小児・老人 21.青年・老人 22.年齢区別せず (15)	
	介入 (要因曝露)	表在 X 線照射：99 例 一回線量 6-10 Gy、6-10 回、マージン 0.5-1cm 電子線照射：290 例 (4~12MeV) 一回線量 3 Gy 週 4 回、17-18 回 (計 51-64 Gy)、 マージン 1-1.5cm、copper foil (表面補正) 大きな腫瘍では、2 Gy/回、週 5 回、計 60 Gy	
	エンドポイント (アウトカム)	エンドポイント	区分
	1	局所制御率	1.主要 2.副次 3.その他 (3)
2	整容性	1.主要 2.副次 3.その他 (3)	
3		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
4		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
5		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
6		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
7		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
8		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
9		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
10		1.主要 2.副次 3.その他 ( )	
主な結果	全体の局所制御率：95.1% 表在 X 線照射：97%、電子線照射：94.5% 小さな腫瘍（照射野<10 cm <sup>2</sup> ）の局所再発率：2.2% 大きな腫瘍（照射野>50 cm <sup>2</sup> ）の局所再発率：13.8% 基底細胞癌の局所再発率：4.1% 扁平上皮癌の局所再発率：7.5% 整容性は良好（91%）表在 X 線より電子線照射が優れている（Good: 約 80% vs. 約 50%、Fair: 約 1% vs. 約 15%）		

	結論	電子線照射は表在 X 線照射と局所制御率において同等の成績であった。また腫瘍が大きい場合においても良好。他の報告で電子線照射が劣るとの報告は技術的要因がある。
	備考	
レビュワーコメント	レビュワー氏名	鹿間 直人
	レビュワーコメント	表在 X 線照射は一回線量が極めて高い。この他の報告を含め、放射線治療に伴う結合線の線硬化による引きつれという毒性が現在通常用いられる電子線一回線量を 2~3 Gy 程度とした場合にはそう多くはないはずであり文献を読む際に注意が必要。 表面補正をするなどの表面線量に対する配慮が重要なポイントの一つ。 レベル IV